

# 東大寺修二會の美について — 行動の美学としてのお水取 —

近藤 英男

東大寺修二會は、天平の時代、実忠和尚によって創始され、爾後千二百年、よくその原型をとどめながら熟成された傳統的宗教的行事として異彩を放っているが、それはまた、行動の美の総合芸術ともいえるべき宗教劇ともみることができるのである。

それは、まさしくリチャード・シエックナーが、パフォーマンス (Performance) — 演技の低位概念を考えて、祭儀と演劇を同一平面上で論じ、宗教的行事と演劇を中核とする諸芸能、芸術との密接な関連を示したように、「お水取り」や「お松明」と呼ばれる修二會の行法の中に、吾々はその最も典型的なものともみることができるのである。

本研究は、こうしたパフォーマンス — 行動の美学 — の観点から、この行法に秘められている美の世界の分析と吟味を試みたものである。

1. 修二會は、2月20日より3月15日まで約25日間、「六時」 — 日中、日没、初夜、半夜、待夜、晨朝 — にわたる総勢50余名 (練行衆 — 四職、平衆、役人など) により、東大寺二月堂を中心として行われる行法である。

2. 修二會の主要行事は、行動美学 — 人間の行動、行為が機能的にも、形態的にも、精神的にも洗練され、優秀ゲシタルトとして定型化されたもの — として、日本の芸能、芸術性に深い関連があり、その原点として注目される。

## イ 造型芸術に関連するもの

日常生活からの断絶がはかられ、独自の生活用品が創案工夫され、紙衣、差懸 (くつ) 椿、南天などの造花、食堂机 (二月堂机)、日の丸盆など、極めてすぐれた工芸的な造型性がみられる。

## ロ 作法、礼法に関連するもの

社参 (巡拜次第)、入浴の儀式、食堂作法など、形式的にも内容的にも洗練され、わが国独自の茶道などにつながる行動美学の原点ともみられる宗教的儀礼がうかがわれる。

## ハ 音楽に関するもの

器楽としての数珠、大貝、小貝、大鈴、小鈴、差掛 (木くつ) 鐘、麻衣のすれ音、戸板をたたく棒と独自の声明。時刻によって変化する宝号 (南無観自在菩薩) は微妙な音楽的構成をもち、能勢博士が、うたいの原型とされる高い音楽性をもつ。

## ニ 演劇に関連するもの

帳上げ (戸帳のまきおろし)、走りの行法、五体投地、散華行道などむしろ舞踏的ともいえるまで洗練され、象徴化されている。

## ホ 舞踊性に関連するもの

二月堂にかざされる竈松明は、いわゆる“おたいまつ”として火の乱舞、火の輪のうづまきとしての一の物体舞踊ともみられ、行法のクライマックスに踊られる達院の妙法は、単純なリズムによる原始的舞踊として特異な位置づけすることができよう。

3. 修二會の行事 (試別火、総別火、上七日、下七日) は、練行衆が宗教的法悦境にいたるカリキュラムであり、また総合芸術としてのシナリオともいえるべき重要な意味あいをもっている。

すなわち、試別火、総別火は、日常世界からの超脱、遮断として現実世号からの超越がはかられており、3月1日からの上七日、下七日において、単なる観想や冥想によるのではなく、我々の存在の根底に下降し、本来的な深層心理のレベルでの身心の総合を新たに生きる一つの試みとして、変身、変貌としての各種の多彩な行法 — 行動美学 — によって、人格転換による脱我 → 恍惚 → 法悦への道が企図されていることは括目される。

そのためには行動そのものが、美的体験としての特性が必要であり、この故に修二會の行法はまさに行動の美学として極めて洗練された芸術性を秘めている。またそれを観る一般観衆にも、演劇にもいた美的感動に打たれ、宗教的エクスタシーの一端を味うことが可能といえるのである。

4. 修二會のもつ汎アジア的な国際性について 修二會の創始者実忠和尚はインドから渡来したといわれるよう、その世界は、まさしく汎アジア的な巨現的なエキゾチックな性格にあふれていることを見逃すことはできない。

日本芸能文化の原点として、こうした汎アジア的な色彩をうかがうことができるのは、爾後の日本芸能史究展の原像として注目される所以である。

その一例として、私は、能楽における橋掛の原型を二月堂にいたる左右の石段においてみることができることを提案するものである。

小島芳正氏の「能舞台変遷史」にもみられるように、寛政までの橋掛りは舞台のまうしろであったものが爾後しだいに左よりになり、やがて歌舞伎の花道にも通ずるのであるが、その転換の機を修二會における石段をあがるたいまつを二月堂における火の乱舞とむすびつけて、これらが能における橋掛りの変遷の一因をなすとの假説であるが、文献的には明らかでなく今後の課題といたしたい。

以上、修二會のもつ行動美学としての特性について若干のべたのであるが、各芸術領域毎にその原型探策としての新しい史的考察の眼が開かれることを念願として稿をとじたい。

本研究について、奈良教育大学、牧野英三、教授より、録音テープなど、種々御指導たまわり、厚く御礼申上げるしだいである。